

《登場人物》

・燃尽王ゴードイング Golding

・妻ローレンシア Laurentia 略称ローラ

・子供ゴードステイン Goldstein 略称ゴードイ

別名エテルヌス

《世紀》第2紀

《場所》ゴルノール 大陸片スウインデル

《時代諸相》英雄の時代前期

ローレンシアは決してかわいくはなかった。見るからに高慢な気が、そのツンとした小さすぎる鼻や、薄い青の混じった鋭い灰色の瞳に漂っていた。引き締まった小さい唇。ウルフのブロンドの髪は孤高の印象を与え、それで満足しているようだった。

それでも生まれつき何一つ満足しないことはなく、たぶん自分がかわいくないことも気にしなかった。

彼女は曾孫である、かつてこの大陸を統一したロードウインの。その財産は統治が分かれて、王国が乱立しても、十分すぎるほど残っていた。

彼女が満足できなくなったのは、夫ゴードイングと結婚してからだ。太い眉毛、堂々とした顎。ぼつりした赤い頬と、厚かましばな鼻。鋭い赤い目つきは今にも燃え出しそうなようだった。彼は戦闘狂そのもの。今まで捉えた捕虜は数知れず。そのほとんどが彼の饗宴のために、燃やされて灰になった。その灰は森にまかれ、犠牲者に同情するように木々は枯れてしまった。

「なあ、頼むよ。女を養うは老人の仕事、女を喜ばせるのは若者の役目だつてよく言うじゃないか。世界がそう言ってるんだ。それに俺も嫌じゃない。だから一つ契約したんだ。これほど上質な取り決めはないだろう。悪いのはそうあれと望んでいる世界だ。それに君も、俺らの夜に不満はないだろう？」

そういつて彼は戦争のついでに各地の娼婦と何度も同衾した。

——どうして彼は自由に遊べて私はそうじゃないのかしら……。

女は家にいて家事をして、子供の面倒を見るべきだ。戦地帰りの夫を慰める癒し手であるべきだ。そうした声

なき声が、人々が息をするのと同じぐらい当たり前だという様子をして、彼女を追い詰めた。

彼女が不満だった理由はもう一つ、子供だ。名前は夫が付けた。ゴードステイン。父親譲りの暗い黄金の髪と、赤い宝石のような目をしていた。それらは赤い恒星のようにじっと彼女を見つめる。

——ああ！嫌だわ。

無理に押し付けられた気がして、愛情を抱けなかった。

——私は無理をして産んでしまったのね。

子供が息をするのにも責任を感じてしまう。

「お母さん、見てよ！これ僕がやったんだよ」そう言つて絹のチュニツクを着たゴードステインは的の中央に見事に当たつた矢を指さしていた。ローラが聖堂から大広間へ続く回廊を歩いている時だった。右手には壁、左手には柱が等間隔に並んでおり、上部でアーチ状になって天井と繋がっていた。子供はその柱の間から見える庭で武芸の稽古をしていたのだ。

「素晴らしい、素晴らしいわ！」

ローラの口が独りでに言った。会話している間、ローラは自分がどう見えるか想像していた。部屋着の絹のドレスを着た城主夫人が、その子供と楽しそうに話している。さぞ、理想的に見えるに違いない……。

「お母さん」ローラは大広間に一人で向かう間ボソッと呟いてみた。しかしその言葉を聞くと心臓がキュッと絞めあがる感じがした。まるで、お母さんなんだから息子の面倒を見なきゃだめよ、と暗に言われているようだ。

——ゴードアマード・ステイン・エルクネスは愛を強いる子供なんだわ。

大広間へ向かいながらローラは思う。表面上は優しく接したが、心の底に、子供を愛することができない冷淡な一面があると自分でも分かっていた。

——このまま城に閉じこもってしわくちやになるのかしら。そんなの嫌だわ！

ローラはそわそわし出した。

そんなわけで、やがて城内は声にはならない、名声が欲しい！もつと私を認めてほしい！という囁きでいっぱいになった。心の声だ。子供にだけ聞こえた。太陽が沈み、昇るのを繰り返すうちに、いつしかその声なき声が城を満たした。城壁の苔むしたレンガの間から、跳ね橋を引つ張りあげる太い鎖から、離れの八角形の塔オクタゴレンにある厠の穴から、中庭の壁際にある武器庫から聞こえた。あるいは夕日を受けて郷愁を漂わせる聖堂のステンドグラスから、そして城主の部屋に飾ってある立派な雄鹿の剥製から、しまいには稽古の剣戟のガチャガチャという音から。

ある日、ゴードイが中庭へ行くため、部屋から出て、螺旋状の吹き抜け階段を下りて、回廊へ出て城主夫人の部屋の前を通つた時のこと。部屋の中でローラが叫んでいた。

「……られないわ。私は運を使い果たしてしまったのね！こんなことなら子供の時、将来のためにとっておけばよかつたわ。このまま城の中で朽ちていくのは……」そこでゴードイは彼自身の赤い宝石のような目にか

て誓つた。

——僕が頑張つてお母さんに幸運を呼んでみせる、と。

泣き疲れたローラは、以前、城下街で売っていた宝石のことを考えていた。赤い星を散りばめた豪華なサテンのドレスでも彼女は満足しなかった。

——あの燃えるように赤い宝石がここにあれば！手の平に包んでぎゅってできるのに。

でもローラは部屋から出たくなかつた。そして、自分が円ルベライトの宝石を持っている姿を想像して満足した。

——こんど買いにいきましよう。それも一つじゃないわ。沢山箱詰めを買つて、この部屋に飾り尽くすのよ。ああ、きつと幸せになれるわ。

それからゴードイはすべてにおいて完璧であろうとした。彼は半狂乱の状態で、赤い目はメラメラと燃える炎さながらすべての文字を呑み込み、記憶し、机に向かつたままいくつもの日の出を迎えた。そして彼は叫んでいた。

「さあ、この目よ！目よ！たくさんものを見て、たくさん覚える！それでたくさん誉め言葉を貰つて、僕を育てたお母さんがすこかつたんですって言うんだ」

武芸も、礼儀作法も、いろんな知識も必死で覚えた。

とりわけ魔術の才能は抜きんでていた。元素魔術、空間魔術、重力魔術と次々に修得し、十二歳で魔術の七大領域

ヘブタドリレヒウム

を修めてしまった。これにはゴーディの魔術指南役も驚き、自分に教える資格があるのか不安になった。怖くなくなったマジスターは聞いた。

「坊ちやま、一体どうなさってしまったのですか。まるで何かに追われているような猛勉強ぶり。その姿勢は素晴らしいですが、行き過ぎると身体を壊しますぞ」

「壊れないよ」ゴーディは、赤い目をギラギラさせながら言った。

「僕はツイてるんだ。あの日以来何をしても上手くいく。まるで運が僕に味方しているみたいだ！」

「あの日とは？」マジスターが聞いた。

「僕がお母さんのために賞賛をみんなからごっそり頂くと決めた日から。でも、お母さんには言わないで、お願い」

マジスターは約束を守ったが、皆に知られるのは時間の問題だった。

そんな調子でゴーディは、市井に行つて剣術武闘会で

優勝した。また魔術の模擬戦で、グラント・マジスター大魔術師の負け知ら

ずの息子を破った。市民は口々にゴーディを讃えて叫ん

だ、フェリックス・ゴードイ・エテルヌス神の寵児、ここにいませり！と。

「さすが城主の息子だ！」と誰かが言った。それに対しゴーディはローラに聞こえるように叫んだ。

「父上は今、戦場にいます。ここに居るのは母上であり、全ての賞賛は母上に帰すべきです！」

ローラは周りの喝采に酔いしれた——たぶん子供のことは心配していた。

——ああ、みんなが私を見ている。私を讃えている。そう思うとゾクゾクした。

——この子がいれば幸せだわ。

ローラの胸にあるルベライトの宝石が光る。

そうしてあの不気味な城の囁きはピタリと止んだ。

ゴーディングの戦勝の知らせが届いた時、ローラは中庭脇の花壇を見ていた。真つ白なグラジオラスを見ながら、自分に運が戻ってきたと思つた。すると、花壇の後ろから小さいローラが満ち足りた様子で元氣よく頭を出し、こちらを見てきた。ローラは笑顔になった。大量に買ったルベライトは結局箱から出さないまま放置しており、ローラは突き動かされるように子供に寄り添うようになった。しかしそれは愛情故ではなかった。何か他の、深い欲望の故だった。

勝鬨の宴は、ゴーディングの戦友、アングロス伯の館で開かれた。場所はローラたちがいる城——フレイ城——の南東。馬車に乗りながら向かう途中、ローラとゴーディは地面を歩く人々から尊敬のまなざしを受けた。貴人しか乗ることの許されない黒い駿馬、そのたてがみは光沢を発するほど艶やかに梳かれており、風が吹けば空を翔けるようだった。二人はその馬に乗りながら人々の間を歩いた。

その人だまりから声が聞こえた。

——まあ、エテルヌス様よ。なんて立派でかわいいんでしょう！

“かわいい??” 驚きのあまりローラは体が熱くなった。かわいいなんて思つたこともなかったわ——。

「かわいい……」ローラは呟くとその響きにどことなく惹かれた。この言葉はたぶんいいに違いない。「ねえ、私ってかわいい？」ローラは子供に聞いた。

「はい、お母様はとても綺麗です」

また城内が声なき声に包まれた。

——私ってかわいい？

厩舎の馬のいななきが、星見櫓から見える月が、落とし格子の巨大な杭が囁いている。ゴーディ一人でいくらか誉めそやしても、囁きは消えなかった。

ゴーディは悩んだ。誉め言葉は商品のように母に渡すことができた。しかし“かわいい”は本人だけにしか向けられない。それでも諦めなかった。

「目よ！そらっ！さあ！見つけるんだ。お母さんが満足するところを見せろ！今まで得た知識は、いざという時に立たないものなのか！違うだろ、さあ、さあ、さあ！もっと遠くへ。僕よ！僕そのものの領域から飛び出して、もっとお母さんが幸せになるところまで行くんだ」

ローラは最近、子供が心配だった。夜になると子供がいる塔から不気味な音が聞こえる。何か黒いものがうねっているような音、まるで親子の情を割くような轟音、子供の中に死を住まわせるような噪音。

——あの子がいなきや私は生きていけないわ。

ある晩、あまりにも音がうるさいのでローラは仕方なく離れの塔まで来た。塔の螺旋階段を上り、あの不快なうねりの音が大きくなるにつれて、膝が震えているのを感じた。ローラはサテンのドレスの裾を力一杯握った。ドレスに爪の後が深く残るほどに。震える手でドアの取っ手に手を近付けたが、一度手を引き、深く息をして、心を整えた。

その間、ローラの背後の暗闇から、あの満ち足りた小さいローラがひよこひよこ素早く顔を出していた。——だめ、その扉を開けちゃだめ！開けたらまた私を見失ってしまうわ。

小さいローラは白いワンピースに、インディゴライトの首飾りを付けていた。

ローラは片手を強く握りしめる。爪が手の平に食い込み汗が溜まるのを感じる。そしてもう一方の手でドアを開けた。

すると突然、月の光に照らされて、掌底で両目を強く抑え、背中をのけぞらせながら、上を向いて叫んでいる。ゴードイが視界に入った。彼は言葉にならない嗚咽を叫んだ後、虚ろな、生気の抜けた目でローラを眺めた。そうして頭から床に倒れた。

ローラは素早く駆け寄り肩を抱きかかえた——涙は出なかった。

「やめて！死なないで。駄目よ！あなたがいないと私は……私は……」するとローラは急にゴードイを抱えて走り出し、中庭へ走った。そうして城内から飛び出し、城下街へ向かった。城内お抱えの医者がいるにも関わらず、人目の多い場所に着くや否や、ローラは大声をあげて泣

き出した。月は、照らすのは縁起が悪いと言わんばかりに雲に身を隠し、木々は身震いをし、花々はどことなく下を向いているようだった。悲痛な、鋭い、空気を割く叫び。周りに人たかりができて、ひそひそと話し始めた。

「何があったのかしら」

「おい、あれってエテルヌス様じゃないか」

「本当だ、でもぐったりしてまるで魂が抜けているみたい」

「おい、誰か医者を！」

「ローレンシア様は、子供を思っ泣いているんだわ」

「それにしても、我が子を思っ泣く姿はなんとあどけなくて、かわいいんでしょう」

その声を聞いてローラは、泣きながら頬を紅潮させ、耳のてっぺんまで赤くなった。

しかし、身に着けているルベライトは最後の光を放つと、ゴードイの淡い瞳のように、光沢のない虚ろな赤色になった。

大ホールと中庭をつなぐ、傾斜の緩い階段にローラとゴードイが座っている。ゴードイが苛立たしように床を踏んでいる。毛皮で裏打ちされたマントは両肩の辺りで獅子の象徴で留めてあり、その下にビロードの胴衣を着ている。腰には銀の流線を描かれた竜のメダリオン・ベルトを付けている。ローラは記憶を回想していた。

夜空に照らされて、ゴードイは台の上に横たわっている。二メートルほどの大人一人が乗れそうな台は、その

側面にいくつかのレリーフが彫られていた。流水形の打ち出し模様の軌道を描いている星々を繋ぎとめる賢者の絵。竜と星見が互いに詩を吟じる絵。巨大樹に聖別を願う修道獣人の絵。

ラヴグマジンスター

その台の周りを大勢の若魔術師が囲み、なにかブツブツと言っている。曰く、子供の魂と交信しているそうだ。

「お坊ちゃまの魂はどこか遠くへ行ってしまったら」

グラランド・マジスターが言った。

「もう、戻ってこないのかしら……」ローラはやけに近づきながら聞いた。

「分かりません、」グラランド・マジスターは落ち着かない様子で鼻の頭を掻きながら、ローラから目を離し、下を見た。「それは彼次第です。彼が戻ってきたいと思える場所ここになければ、可能性はありません」

ゴードイの大きなため息でローラは我に返った。ローラは居ても立ってもいられず立ち去ろうとする、

「ねえ、頼むから、もう少し居てくれないか？」と彼はその赤い瞳に夕日を受けながら聞いた。辺りは静寂に包まれており、鳥のさえずりが聞こえ、そよ風が吹いた。

「俺も子供だったんだなあ、戦争にかまけて君だけに子供を任せてしまった」

「そんな、私こそもっとしっかり子供と向き合うべきだったわ」非難されるとばかり思い込んでいたローラは少しほっとしてゴードイの横顔を覗いた。けれど、ゴードイはこちらを見なかった。

「戦争のせいだよ。全部戦争が悪いんだ。俺が君と過ごせないのも、子供があんなになってしまったのも、君がヒステリーを起こしてしまったのも」

——ヒステリーなんて起こしてないわ!

最後の言葉はローラにとつて真実ではなかった。

——でもいいわ、それより今は子供。子供のことを考えなくちゃ。

夫と子供について話すのは、今は楽しかった。

「そうよ、貴方も私も悪くないのよ」

「俺たちは生まれた時代を間違えちゃったんだよ。戦争さえなければ……。でも、そう言つてばかりいられない。俺が戦争に行つて勝たなきゃ、君もこの領民たちも荒野を歩くことになる。だから俺はまた戦争に行かなくちゃいけないけど、その時君はちゃんと役目を果たせるかい?」

「ええ、私頑張るわ。貴方がそう言つてくれるなら。貴方の役目は戦争。私の役目は子育てよね」

「そっだね。戦争がなければもうとうまくやつていけたはずさ」

ローラは紅潮して、彼に少し身を寄せた。やっと同じ景色を見ている気がした。すると花壇の向こうにまた小さなローラが現れた。

「私のこと好き?」甘くハスキーな声でローラが聞いた。

「すごく好きだよ」彼はそう言つとローラに肩を寄せた。

「私のことかわいいと思つ?」

「もちろん、すごくかわいいよ」

ローラは満足して、彼の頭を胸に押し当てた。

でも小さいローラは慌てていた。花壇の向こうで必死にあがき叫んでいた。ダメ!それ以上行ったら戻れなくなる、と。

ゴードینگにはその小さいローラは見えていないよ。うだった、そして彼は言った。

「でも、やっぱり子供が一番かわいいな」

あの小さい、子供のローラは消えてしまった。